いた本を読んだり、映画を見たり、あるいは生存者から経験談を聞いたりした人々は少なくないだろう。なかには、すでにこの事件についての問題点はすべて指摘済みであり、事件についての論議はもう十分に尽くされているという印象を持っている人々もいるかも知れない。しかし、もう一歩踏み込んで事実の解明を進めれば、従来の情報の多くが非常に偏っており、誤解を生みやすいものであることに気づくはずである。

たとえば、「ワルシャワ蜂起」と呼ばれる行動に実際に参加した地下抵抗組織の兵士たち自身は、「ワルシャワ蜂起」という言葉を一度も使っていない。彼らは第二次大戦末期の欧州東部戦線における全般的戦況の中で、ひとつの作戦を実行し、それを「ワルシャワのための戦い」と呼んでいたのである。「ワルシャワ蜂起」または「ワルシャワの反乱」という呼び名が生まれるのはワルシャワが壊滅した後のことであり、特に戦後になって、様々な立場の人々がそれぞれの理由からそれらの呼称を広く使うようになった。

ワルシャワは、当時も今も、ポーランドの首都である。そして、一九四四年当時、ポーランドは英国の最も身近な同盟国だった。政治的な意味で言えば、ポーランド亡命政府は対英同盟を通じて英米主導の民主主義陣営に属し、連合国の重要なメンバーとしての地位を占めていた。当時は、いわゆる「列強諸国」だけがトップ・テーブルを占めて、他の中小同盟諸国の運命を一方的に決定するという旧世界のシステムが働いていたが、そのシステムでは、英米両国は同盟諸国を保護する義務を負っていた。一方、地政学的な意味でヨーロッパ大陸の中央に位置するワルシャワは、大戦の最大の交戦国ナチス・ドイツとソ連が直接に対峙する前線上にあった。「蜂起」が勃発したのは、動乱のヨーロッパのまさに中心地だったのである。それは史上最大の規模で戦われていた独ソ戦の最前線で発生した事件だったが、単にそれだけではなかった。西欧の民主主義陣営が一方でファシズムと戦い、もう一方でスターリンの共産主義に対峙するという状況下で、その三者が複雑にせめぎ合う結節点で発生した事件が「ワルシャワ蜂起」だった。決して単なる局地的な小競り合いではなかったのである。

これらの事情を説明することがいかに難しいか、その理由は枚挙に暇がないほど多い。そもそも、中央ヨーロッパの歴史が中央ヨーロッパ以外の場所で詳細に研究された例はこれまでほとんどない。しかも、一九三九～四五年に連合国陣営のなかで中小の連合加盟国が果たした勇敢な役割は、今となってはほとんど忘れ去られている。現在の世界政治においても見られることだが、歴史上の問題についても、一度は連合国陣営に属したものの、その後別の同盟関係に移行したような諸国に対する人々の見方には厳しいものがある。歴史家たちは、発言権の大きい有力諸国、華々しい話題を集める列強諸国の歴史は喜んで取り上げるが、その一方で、対立する陣営間で立場を変えたような中小諸国の問題はないがしろにしがちである。したがって、ワルシャワ蜂起を記述するにあたっては、ワルシャワという町を連合諸国、ドイツ、ソ連の三つ巴の戦争の中に正確に位置づけ、当時の複雑な国際的背景を十分に解明し、その上で、蜂起そのものの実態に迫ることが重要である。

欧州大戦を戦った西側の列強諸国はドイツに対して決定的な勝利を収めた。その結果、当然のことながら、それらの諸国の人々の多くは、戦争中と戦後とを明確に区分された二つの時代として理解している。また、一九四五年の勝利を神聖な記憶として記念しているロシア人たちも、ドイツからの「解放」以前と「解放」以降を夜と昼のように明確に区別された時代として意識している。しかし、中東欧地域の多数の国々では、第二次大戦の終結は、ひとつの全体主義国家による占領の終りではあったが、同時に別の全体主義国家による占領の始まりでしかなかった。そのため、中東欧地域では、「ヨーロッパ戦勝記念日」（VEデー）は大して重要な意味を持っていない。さらに、「解放」という言葉についても、もし、それが紛争や苦悩からの最終的な救済という意味なら、悪い冗談でしかなかった。

ワルシャワ蜂起 1944

上

英雄の戦い

RISING'44

The Battle for Warsaw

ノーマン・デイヴィス

訳◆染谷徹

「胸が締めつけられる…史上最大の英雄的な悲劇」

アントニー・ビーヴァー

欧州大戦全般を俯瞰しながら、ポーランド史の文脈に「蜂起」を位置づける。

肉声が伝える臨場感、抵抗運動の真実に迫る決定版!

欧米各紙誌が激賞、英国の重鎮による圧巻の書

口絵写真多数収録

白水社